福島の子どもたちは今

福島第一原発の事故から6年たちました。

福島に残されている子どもたちに今何が起きているでしょうか。

私はチェルノブイリ事故後の子どもたちの支援に関わったのはちょうど事故後5～6年頃からでした。

今、福島の子どもたちは、確実にチェルノブイリ事故後の後を追っています。

未来の福島こども基金代表　黒部信一

福島はチェルノブイリの後を追っています

- 子どもの甲状腺がんの増加
- 子どもの免疫力の低下
- 子どものアレルギー疾患の増加
- それに加えて発達障害の子どもの増加
- 大人の血液疾患（白血病、悪性リンパ腫）の増加
- 大人のがんによる死亡が目立つと言われています
- 大人の筋肉の硬くなる病気が出ているようです。それは死因としては心筋梗塞として処理されていますが、病理解剖をしていないので、真相は判りません。

爆発直後に高濃度に被曝した人から出始める（初期被曝が大きく影響）

- チェルノブイリでは、４年後頃から子どもの甲状腺がんが出始めました。それは初期に被曝した子どもが主でした。
- 大人のがんも、初期から出たのは、高濃度に被曝した人たちでした。チェルノブイリ原発の周辺に住んでいた人と、消火にあたった人たち（消防、軍、原発労働者）でした。
- 普通、大人のがんは１０年後から増え始めると言われています。
- 例外は、白血病で年齢を問わず、３年後から増え始めます。
- 子どもの白血病は少なかったです。

では福島では、初期被曝は

- 福島では、初期被曝線量の直接測定も、環境測定も、遅く、少なく、その後の推定が限られてしまった。
- 避難が早く、避難先がよかった双葉町が一番少なかったようです。
- ついで、福島市、川俣町、南相馬市などの一部の被曝線量の低かった地区への避難した人たちです。今後は少なくとも、

  １００ｋｍ以遠に避難場所を選定すべきです。
- 日本の地形は、山脈により風の流れがあり、それによって必ずしも距離だけでは被曝線量を推定できませんので、ぜひ実際測定された線量が求められましたが、公表されていません。

被ばく牛調査途中報告(東京新聞)

- 2016.9.26の東京新聞に「原発事故被災動物と環境研究会」(伊藤伸彦・北里大名誉教授代表)の調査報告が載っていました。そこには当初２６０頭が、自然減(?)で現在１３４頭です。
- 牛の体内には、放射性セシウムが筋肉(わかりやすく言うとサーロイン、ヒレ、モモなど）に集中していました。
- 牛のすべてに牛白血病に感染していました。(一般には４割程度が感染しているのです)感染しても発病するとは限りませんが。
- また甲状腺肥大が２頭いました。
- いずれにせよ、自然減の原因は何か、老衰か餓死かがんかは、どうかは判りません。

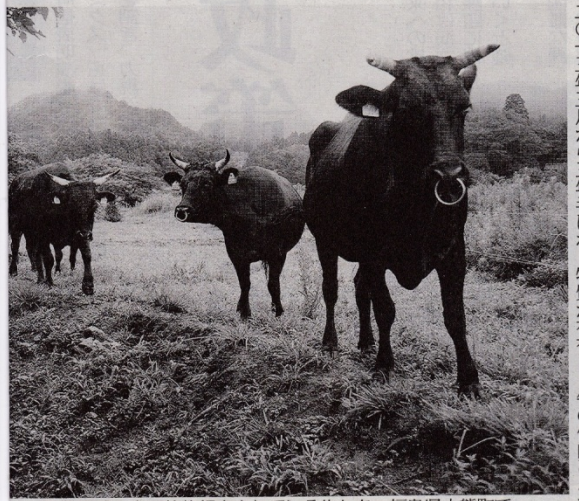
東京新聞の記事

（第3種郵便物認可）　2016/9/26（水）　東京新

3・11後を生きる

甲状腺肥大、牛白血病も

坂本充孝の ふくしま便り



避難区域の中で放牧飼育されている牛たち＝福島県大熊町で

福島県の原発被災地に取り残された牛に関する調査が最終段階を迎えている。血液検査や解剖などを実施した結果、被ばく牛の中に甲状腺の肥大や牛白血病の感染拡大などが確認されており、こうした症状が内部被ばくと因果関係を持つか否かを慎重に見極めるのが、今後の作業になるという。放射能汚染が大型の哺乳動物に与える影響を追跡した研究は世界に例がなく、人の健康問題へも大きな示唆を与える可能性がある。

研究チームは北里大、岩手大などの研究者による「原発事故被災動物と環境研究会」。伊藤伸彦・北里大名誉教授が代表を務める。原発事故から二年後の二〇一三年三月から三年半にわたって避難区域に入り、安楽死処分を逃れて飼育されている牛の調査を実施してきた。当初は二百六十頭を対象としていたが、現在は自然減で百三十四頭になっている。

◆◆◆◆◆

調査は、大きく分けて二本の柱から成る。まず牛が飼育されている環境にどれほどの放射性物質が存在し、牛の体内にどれほど取り込まれているかを計測する。放牧場の空間線量、土壌線量を測り、牛の首にも線量計を着けた。さらに死んだ牛を解剖し、取り込まれた放射性セシウムの量などを調べた。

この結果、放射性セシウムは、食肉の部位でいうサーロイン、ヒレ、モモなどの筋肉に集中することがわかった。たとえば一三年の数字で、ある牛のモモには一キロあたり八五〇ベクレル以上の高密度で放射性セシウムがあった。食品衛生法の基準値である一キロあたり一〇〇ベクレルを大幅に上回る数値だ。

ところが輸入した乾燥牧草など、汚染されていないエサを与えると、この数値は劇的に下がった。二週間～一カ月で半減し、当初の予想より二倍近く速かった。

季節による変化もみられ、五月と十二月を比べると五月の方が数値が高かった。これは牧場内で育った牧草を牛が食べてしまった結果とみている。

「避難区域以外で飼われている家畜については、汚染されたエサを食べさせないのが大切」と伊藤名誉教授は話す。

こうした放射性物質が影響を与えているか否かは保留するとがんで、原因はアブを媒介とするウイルス。感染しても発症するとは限らず、国内の牛の四割ほどがウイルスを保持している。人間に感染することはない。

◆◆◆◆◆

しかし避難区域の牛の感染率の高さは特別だという。

岡田教授は「放牧という飼育方法では感染を防ぎようがない。それが最大の原因」と話すが、一方で免疫機能が低下した可能性も捨てきれないとする。

また、甲状腺が肥大している牛も二頭、発見された。百頭以上を調べた結果で高い確率とはいえないが、「原因は不明」（岡田教授）という。気になるところだ。

皮膚に白斑が出た牛は二十頭ほどもいる。しかし白斑牛は、放射線量が高い牧場で現れず、むしろ低い農場によく現れる。「ストレス過多などの要因も考えられる」という。

被ばくと健康被害については、対象が人間であっても「因果関係はわからない」とされることが多い。しかし、わからないから存在しないという切り捨て方をすれば、疑念が膨らむばかりだ。異変の事例を積み上げていく作業が大切だろう。

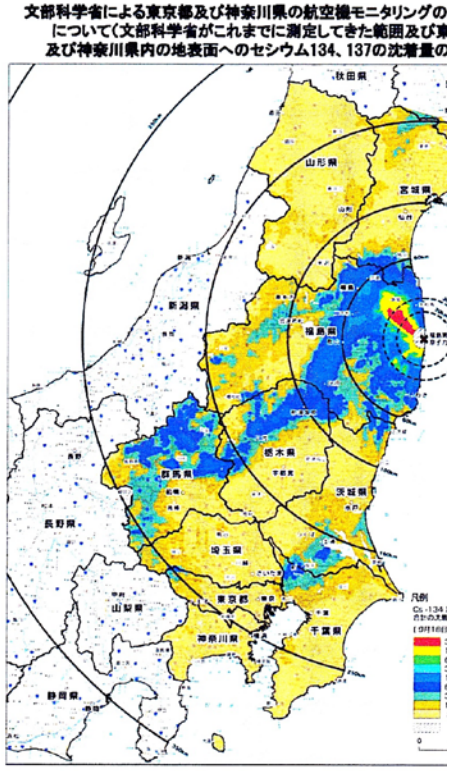
研究グループは来年三月をめどに、これまでの成果を論文にまとめることにしている。

東京新聞福島
電話　024(5
FAX　024(5

福島の甲状腺がんの子どもの出身地は原発周辺に多く見られています

- これから甲状腺がんが子どもに増加します。
- チェルノブイリでは、４年後に始まり、甲状腺がんの子どもが次々と増えていきました。
- それなのに検診を縮小することはおかしいことです。甲状腺健診を選択制にすることは、被災者は望んでいません。
- 甲状腺がんの子どもは、原発周辺と初期被曝を受けた子どもに多く見られるようです。避難指示地区13市町村だけでなく、チェルノブイリでは強制避難した線量の地区(福島市、郡山市など中通り地区10市町村)も含みます。いわき市の北部も含まれます。
- 以上の地区で、見つかった子どもの甲状腺がんの７割を占めます。ただし、その地区の人口も多いのですが。

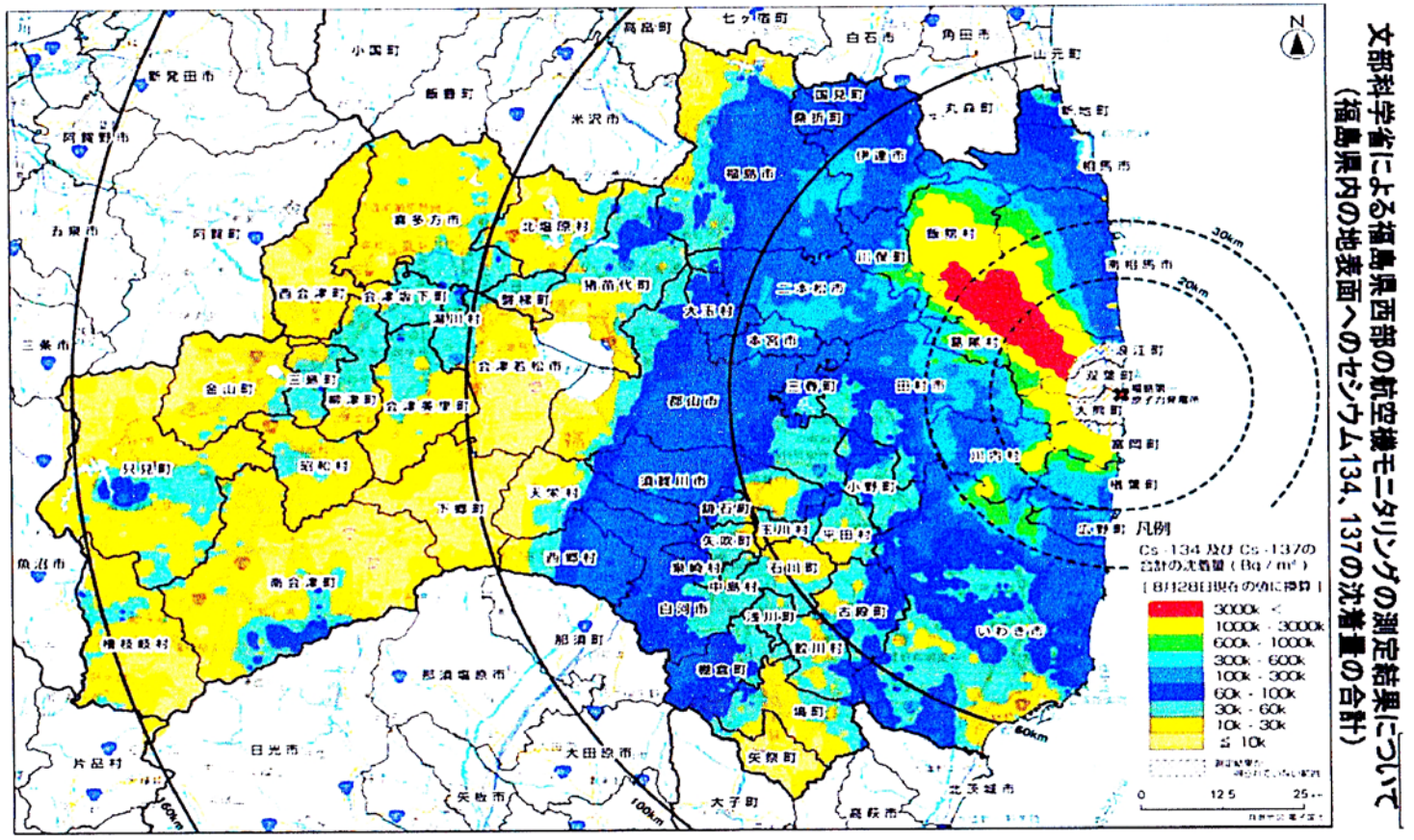
東日本と福島県の土壌汚染状況



広域の土壌汚染地図はこちら・・・・

福島県ー土壌汚染

これを見たら福島県に住んだり、農畜産物を食べる気にはならない
福島県は全域が汚染している



福島県ー1mの空間線量

チェルノブイリ事故後のソ連では

- １．原発推進政策の中止
- 　その時に計画されていた６０基の原発施設の建設中止。
- ２．放射能に汚染された地域に住む住民約１００万人を移住させた。
- ３．主に軍人たちの「除染作業員」数十万人が放射能に苦しめられた。
- 　その対策費も。これによりソ連の崩壊を早めたという。
- （以上週刊金曜日掲載のメドヴェージェフの記事より）
- ４．被曝手帳の交付による医療費の支給
- 　ただし、旧社会主義諸国は、それまでは医療費、教育費、住宅費などは
- 無料だった。
- ５．これに比し、日本では原発推進、住民は放射能汚染地区に残し（移住
- させると１５０万人以上か？）、更に帰還政策をとる。除染作業員対策も
- やっと始まったばかりで、その作業員の特定や移住先も把握していない。

福島から球美の里に保養に来る子どもたちに病気が増えています

- 球美の里に保養に来る子どもたちに、薬持参のこどもが２０１５年から目立ち始めました。当初は考えられなかったことです。
- 申し込んでいて、当日に病気でキャンセルする子が出てきました。
- いつもは保養に球美の里に来ると、元気になり病気をしない子がほとんどでしたが、来てから病気になる子どもが目立ちます。
- また行事に参加できず、見学の子も出ています。
- 事前の健康状況の調査でアレルギーの子が増えています。
- 残念ながら、発達障害の子どもに対する対応ができないのでお断りしているのですが、発達障害の子が増えています。

東京周辺への移住者の子どもの健康相談会では、相談者は減っています

- 福島から東京周辺への移住者組織の一つ「NPO法人　ココロとカラダを育てるハッピープロジェクト」の活動の一つの、当初月１回、今は２か月に１回行なっている健康相談会への相談者が少なくなっています。移住者組織はいくつかに分かれ、また福島からの移住者であることを隠している為に、相談会にも来ない人もいますので、すべてを把握している訳ではありません。
- 東京周辺に移住している子どもたちは、病気になるのは東京に元々住んでいる子どもと同じになっているようです。
- 私はこのＮＰＯ法人の理事で、この法人がすべての福島からの移住者を把握している訳ではなく、また福島の人はいろいろな形で分断されています。それで本当の気持ちを出せません。例えば、強制避難区域はすべての人に補償金が出ますが、それに準じる地域では、測定した放射線値によって隣家と補償が異なります。

福島県甲状腺検査の結果は

- 甲状腺健診では、避難指示が出た１３市町村での甲状腺がんは３１人(+良性１人)、その他の市町村は１４３人でした。
- ２回目の爆発で被ばく線量が高かったと推定されるいわき市は、その他の方に入り、２９人です。やはり被爆当初の高線量地域に入る中通り地区の福島市、郡山市など７市町村もその他の中に入り７７人です。
- つまり初期被曝の地域と、チェルノブイリでは強制離地域になる線量の土地に住んでいる子どもたちに集中しています。計１３７人です。
- その他の市町村は、３７人です。合計１７４人でした。(２０１６年６月末時点、報告は９月)

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

- ２０１７年１０月２０日に公表された福島県民調査報告書によると、小児甲状腺がん及び疑いの子どもたちは、合計１９４人になりました。
- そのうち、手術で確定したのは１５４人（良性腫瘍1例を除く）でした。

甲状腺がんの原因が福島第一原発事故によるものかどうかは、議論されていますが、チェルノブイリでも認められたのは遅かったのです。

- 甲状腺がんは、私は原発事故によるものと考えますが、それは歴史が決めるでしょう。私は、医学は社会科学であるとの、アメリカのシゲリスト、デュボスや日本の白木博次医師の考えを支持しています。つまり原因論は、自然科学的に決定されるのではなく、社会科学的に決定されるべきものだと思います。
- がんの原因は、すべてのがんで言えますが、がんを調べても判りません。一般的には、疫学的に証明しようとしますが、現代社会では、全く同じ条件の対照をとることはほとんど不可能に近いからです。
- 私は、時間と社会(政治)が決めると思います。しかし、・・・これから出る甲状腺がんは、明らかに原発事故によるものです。

福島の子どもたちの変化は始っています

1. 保養に来る子どもたちに変化が起きています。

　それは、球美の里へ保養に来る子どもに、薬持参やアレルギー疾患がある子が増えています。発達障害の子もまぎれこんできたり、親たちの間で、なぜ差別するのかという声も出ています。しかし、球美の里では発達障害のお子さんに対応ができません。

2. 保養に来ている間は、差別されることもなく、親も子も何でも思っていることを言えるはずですが、保養に来てから病気になる子が出ています。

　楽しくしていれば免疫は活性化するはずです。だから福島で病気に感染して、来てから発病することはありますが、来てからかぜや扁桃炎になることは考えにくいです。それなのに来てから二度病気になる子もいます。

3. 発達障害については、郡山市の中学の教師が、実感として増えていると言っています。そのために、学級崩壊やある学校では、学校崩壊も起きているようだとの話も聞いていると言っています。

福島とチェルノブイリの違いは

明らかに、福島では

　　アレルギー疾患の増加と発達障害の増加があります。

免疫の低下は、どちらも同じでした。

その違いはどこからでしょうか。

　私の個人的見解は、親特に母親が子どもをかかえ込んでいるのではないでしょうか。国も自治体も、周りの人たちも頼りにならず、子どもの健康を守るのは自分しかいないと思い、子どもの行動を制限したり、食べ物を制限したりしてしまっているためだと思います。

アレルギー疾患も発達障害も、私の提唱する病原環境論または適応説では、　遺伝子または遺伝的要因＋環境　です。

- アレルギー疾患は、既に心療内科で精神的要因が指摘されています。故池見教授の漆かぶれの実験など
- アナフィラキシーショックは、二度目以降に多いのは、不安や恐怖からだということを示しています。そば、蜂刺され、など。
- アレルギーの原因は、検査で判らない場合も少なくないし、また、私の経験では、原因も変化します。
- 子どものアレルギー疾患は、環境を変えやすいので、治すことができます。大人になると、環境も心も変えられず難しいです。

アレルギー疾患も発達障害も、治したり、軽くする可能性があります

- アレルギー疾患の子どもは、環境を変えることで、治すことができます。また自然に周囲の環境も変化するので治ります。
- 思春期になれば、子ども自身が治す意思を持つと、自分の意志で考え方を変えるように話をし、そうして自分で気持ちの持ち方を変えたり、周囲の環境を変えると治ります。
- 発達障害は、
- 　私はまだ勉強が不十分でうまく対応できませんが、上手に育て、リードすることにより、軽症化させる可能性があります。
- 　児童精神科の渡辺久子医師の協力により、それを達成したいと思います。必ずしも薬は必要とは言えません。

お母さんたちのこころを大切に

- 親の不安を、子どもはさらに拡大して不安を持ちます。
- 　　子どもは母親のラウドスピーカー（拡声器）です。
- 親（特に母親）の不安を和らげるために、何をしたら良いか。
- 　一つは、子どもの保養です。保養に行って、そこで子どもがのびのびし、明るくなることです。福島の外に明るい世界があり、子どもたちを受け入れて支えてくれる人たちがいることを知ってもらうことです。
- 　もう一つは、母親の悩みの受け入れ先を作ることです。
- そこで、私はたらちねクリニックへ診療日を持つことにしました。渡辺久子医師も、不定期ですが協力してくれると思います。
- 　三つめは、健診を受けることで、安心してもらうことです。

放射線による発がん性も、環境　特に　こころの問題が大きく左右します。

- 発がんも、免疫システムを突破されることにより、起きることです。
- それに大きくこころの問題も関与します。アメリカの医師のテモショック氏は、がんになりやすい性格を「がん性格ータイプＣ症候群」と言っています。Ｃはｃａｎｃｅｒ（がん）のＣです。
- じっとがまんして、耐え忍ぶ性格と言います。
- 心筋梗塞などの心臓病になりやすい性格は、従来から「Ａ型行動人間」と言われて来ました。仕事人間、ワークアホリックな性格です。
- 免疫も、環境と共にこころの問題が大きく関与しているのです。

大人の白血病や悪性リンパ腫が増えている模様

・福島での白血病の人の発生があるかとの私の呼びかけに、あった情報が、

　一つは、一族で三人白血病になり、二人が死亡。

　あと二つは、福島在住の方の白血病が一人ずつ。また別の人たちから大熊町の白血病の人の話を複数聞きました。

　福島県立医大の血液内科は、事故後特にここ三、四年くらい前から入院待ちです。血液内科の対象は、白血病、悪性リンパ腫などです。

・がんになっても周りに言えません。それで情報が得られません。

　大熊町の避難者の死亡の中で、肺がんと心筋梗塞が増えていると言われています。

　明石氏によれば、胃がん、肝臓がん、卵巣がん、乳がんなどの増加が確認されていると言います。

・うつ病、ＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）も増えています。

子どもたちのための健診センター

・いわき市に健診センターを、診療所を兼ねて作ります
　その名称は「たらちねクリニック」
・場所は、市民放射能測定室「たらちね」内
・所長は内科医の藤田操医師、小児科医は黒部信一医師、
　小児精神科医は渡辺久子医師
・甲状腺検診は、市民放射能測定室「たらちね」で実施
　元北海道がんセンター院長の西尾正道医師とその友人の医師たちや島根大学野宗義博教授とその友人の医師たち、藤田医師が行います。たらちねのブログを見て下さい。
・子どもたちが第一ですが、大人も受け付けます。
　診療も、相談も受けます。講演もします。何でも相談して下さい。

カネマンビルの三階の
たらちねクリニック

たらちねクリニック

たらちねクリニック
ここから入ります

待合室と
ホールボディカウンター

たらちねクリニック

検診と診療内容

- 検診内容は、心電図、血液検査、甲状腺エコー。
- 心と体の検診・相談。
- 子どもも大人も相談にのります。大人は特に母親が対象、高齢者も受付けます。
- 子どもは、親の拡声器で、親の不安を拡大して受け止めます。
- 先ず親が安心すること。
- そのための講演、相談をします。
- 検診ですぐ結果は出ないでしょう。積み重ねが必要です。
- そのための検診で、毎年積み重ね、変化を調べます。
- 今までチェルノブイリ事故後でもしなかったことです。日本だからできることですが、政府や福島県はしません。

なぜ検診が必要か

- 未だに高濃度汚染地に住んでいる子どもが多いこと
- チェルノブイリでは、強制避難区域は年間１ミリシーベルトまでですが、福島は未だに年間２０ミリシーベルト以下のままです。
- 世界で今まで無かった高い低線量被曝が今後も続くこと
- 原爆被爆者がまだ健在なのはなぜか。希望をもち、のびのび生きることで、保養の効果もこれを期待しています。
- 親が不安を持つから、子どもはもっと不安になります。
- まず親の不安を無くしていくこと。
- のびのび子育てして、子どもの免疫を維持することで、発病を減らしましょう。
- 子どもの精神的な安定を図りましょう。

希望が免疫を活性化します

- 私の病原環境論は、環境に適応できない時に病気になるので、適応することで病気にならないことを期待します。
- ストレスが免疫を低下させるのと逆に希望が免疫を活性化します。
- 保養は、子どもたちに希望を持たせるためが最大の目的です。
- がんの自然治癒は、生活環境を変え、治ることに希望を持つことで達成されると思う。現実に、世界で３万人に一人が自然治癒していて、その３千人のカルテを集めた医師がいることも事実です。
- 余命何か月と宣告されながら、長く生き続けているがんの人は生きることに希望を持っている筈です。
- 保養所の球美の里は、沖縄の明るい海の中の島で、子どもたちに希望を持たせる効果があります。
- ベラルーシの保養所ナデジダ（希望）は子どもたちに生きる希望を持たせる役割をしています。

保養所・球美の里

- 残念ながら、球美の里は、中高生に希望を与えられるまでには至っていません。その理由は・・・
- ベラルーシの保養所ナデジダでは、パソコン、音楽機器、日本の折り紙や空手の教室、体育館や大きな施設を備えているが、球美の里にはないです。
- ナデジダで子どもたちは、希望を持ち、医師やパソコン技師になる子どもも出ています。
- ナデジダには医師が常駐し、入所と退所の時に健診をし、明らかに内部被曝を３０％減らしているし、がんのマーカーも減らしています。
- 日本政府は、年間２０ミリシーベルトの上限を、平常時の１ミリシーベルトに戻さず、多くの子どもたちが外部被曝を受けている。その地域は、強制避難区域のほかに福島市、郡山市など福島県の中通り、浜通りのほとんどで人口１５０万近くに及びます。

球美の里の入り口

図書館とカフェ

球美の里保養所の全景

はての浜での海で

はての浜で楽しく

砂遊び

シーサー作り

お母さんたちが希望を持つこと

- お母さんたちが希望を持つと、子どもも希望を持ちます
- 子どもは親の拡声器です。親の不安は、子どもにもっと大きな不安を持たせます。
- 親が子どもの行動を叱ったり、制限することが子どもに不安を与えます。それが病気につながります。
- 希望が持てないなら、福島から離れて下さい。
- 私たちは、福島から離れられない親子を、放射能の被害から食い止めるために、保養所、検診センター、健康相談、こころの相談を続けます。
- 私の本、「予防接種のえらび方と病気にならない育児法」の、予防接種についてはそれぞれが選択することですが、育児法は、予防接種をしない方への育児法で、これは放射能被曝している子どもにもあてはまります。

子育ての仕方を教えます

- 子どもたちに希望を持たせましょう。
- 自然にしていれば、子どもたちはのびのび生きていきます。
- 叱る、強制するなどはせず、ほめて育てること。
- ちょうど、孫悟空が自由にしていても、お釈迦様の手の中にいたというように、子どもたちを親の手の中でのびのびさせて育てるのです。北風と太陽の話の中の太陽になりましょう。
- それにはこつがあります。
- それは、子どもを病気にしない育て方です。
- 私は、希望をもっています。福島のこどもたちがのひのび育ち、放射能の影響を跳ね返していくことです。
- それには、たらちねクリニックと球美の里が応援します。

子どもの危険は事故、自殺、他殺

- 事故の予防は、まず家庭内の事故―転落、誤飲。
- 歩行中の事故も多い（集団登校は落とし穴、安全と思い込む）。
- 歩行中に、信号はあてにならないので周りに注意して歩く。
- 大人の予想外なことを子どもはします。
- 自殺は子どものうつ病から。７歳からあります。
- 親にたたかれると、他の子をたたく。
- 親にいじめられると、他の子をいじめる。
- いじめに父親や男が対処しないとうまくいかない。
- 早くいじめに気付き、自殺を未然に防ぐ。
- 自殺する子は、事前に誰かに打ち明ける。ここで防ぐこと。
- 他殺は、今後増え続ける。予防は子どもを一人にしないこと。

避難者へのいじめは大人社会から

- 避難者の子どもがいじめられるのは、大人社会のいじめにある
- 担任教師が、原発事故を理解していないことが多い
- 原発事故の被害を知った子はいじめに加担しない
- それは、政府の無責任にある。大臣の発言、首相の発言。高線量に汚染され続けている土地への帰還は無謀
- それを否定するなら、政権党の幹部の孫たちを福島へ移住させて見せろ。天皇一家も那須へ行かされ、被害者である。
- 東京電力の無責任。廃炉費用の電気料金への転嫁
- 原子力発電が安いとの宣伝が、嘘だったことの証明である
- 原発は再稼働させてはならない

未来の福島こども基金は、今世界に発信し、世界からの支援を求めています

- 未来の福島こども基金は、チェルノブイリ子ども基金と姉妹団体です。市民放射能測定所たらちね、たらちねクリニック、保養施設・球美の里と一緒に活動しています。
- 世界的には、日本の東北地方の南半分と北関東地方が汚染されていると見られています。
- アメリカのスリーマイル島、旧ソ連邦のチェルノブイリ、そして日本の福島第一原発事故は、原発が安全でないことを明らかにしました。
- 次はフランスでしょうか。それとも地震と津波の国日本での再発でしょうか。長崎、広島、福島の次を作らせてはいけません。

最後に

- 私は以前にいた診療所で、患者さんを集めることに苦労しました。それは、病気が治るし、また病気になることが少なくなり、患者さんが減ってしまうからです。
- アレルギー疾患の子どもたちを治してきました。あるアトピー性皮膚炎の男子の中学生は、初診後二週間して「自分で治した」といばって来院しました。私の言う通りに、気持ちの持ち方を変えて治したのです。
- 気管支喘息の子どもたちは、ほとんど発作を起こさなくなりました。アトピー性皮膚炎の赤ちゃんは、一か月で治りました。
- 子どもの病気は、環境を変えることで治せるのです。
- 移住も、保養も、そしてもっとのびのび生きることが大切です。
- 予防が第一で、がんなどの病気になってからでは遅いのです。
- 放射線なんかに負けないで。できるだけ被曝を防ごう。